2021年7月27日取材

長野県

産地ルポ

リーフレタス

JA佐久浅間
あさま東部営農センター管内

高温期に活躍する「フレアルージュ」と葉折れが少ない「グリーンサンバ」が高評価

（編集部）

←↑
ＪＡ佐久浅間東部営農センター伍賀事務所で「グリーンサンバ」荷姿と農協職員菊原勇人さん。

発表したばかりのタキイのリーフレタス「フレアルージュ」「グリーンサンバ」の評価を伺うため、７月下旬にＪＡ佐久浅間あさま東部営農センター伍賀事務所を訪ねました。

伍賀（ご か）地区は首都圏向け夏野菜の一大拠点

この地区には代表的な避暑地である軽井沢があり、このことからも、その交通条件のよさ、夏季の快適な涼しい気候は理解していただけるでしょう。なお、ＪＡ佐久浅間は北を群馬県の嬬恋地区と接しており、浅間山麓全体が大きな夏の葉菜の供給地です。

あさま東部営農センター伍賀事務所の出荷生産者は90名ほど。レタス類、ハクサイ、キャベツが主力ですが、ブロッコリー、カリフラワーなども作付けされています。

野菜全体の出荷期間は４月下旬からリーフレタスがスタートし、10月からはブロッコリー、カリフラワー類が始まり、12月上旬まで続きます。主な出荷先はその立地条件からも首都圏、阪神、中京地区となっています。

ＪＡ佐久浅間は長野県の東部にあり、浅間山の南麓に位置します。中でもあさま東部営農センター管内（伍賀地区）は軽井沢町、佐久市、小諸市に挟まれた御代田町を中心にした地域で、標高は800～1000mで、高原野菜の栽培の代表的な産地として知られています。気候が葉菜類の夏期栽培に向いていることはもちろん、軽井沢バイパス、上信越自動車道が整備されており首都圏および中京、阪神方面への短期間での輸送が可能な立地です。

近年増加するリーフレタス栽培

近年の需要と価格動向から、レタスが多く栽培されるようになり、その中でもリーフ系が増えつつあります。現在ではリーフ系と玉レタスの比率はリーフ７、玉３程度となっています。

レタス類の出荷時期は４月下旬～10月中旬までで、５月中旬からが最盛期となりますが、近年の夏季の暑さでも比較的作りやすく、作業性のよいリーフ系が評価されているようです。

リーフ系の中では、レッド系とグリーン系の比率は７：３の計画となっています。農協職員の菊原勇人さんによれば、従来の病害に強いことはもちろん、根腐（ねぐさ）れ病レース１・２に強いことが必須条件となっているとのことです。

管内での夏季の栽培方法

育苗は２００穴セルトレイを使用し、18～20日間育苗、定植後40～42日で収穫・出荷します。株間27cm条間45cm程

度の1条植えです。マルチは白黒0・02×135×400が主力で、全面をマルチで覆います。圃場の使用はシーズン中2回転程度です。

事例① 伍賀地区 大木 晃さん 「フレアルージュ」

大木晃さんはすべてリーフ系を栽培。4月下旬から10月中旬まで、延べ10ha程度の栽培・出荷をしておられ、出荷数が多くなるのは5月中旬からです。現在はレッド系が80%を占めています。

↑大木晃さん。

↑「フレアルージュ」は立性で尻のまとまりやそろいもよい。5月29日まき（200穴セルトレイ）、6月20日定植（7月27日収穫直前の圃場）。下は収穫後の「フレアルージュ」の株。

「フレアルージュ」は2021年から試作しており、2022年は一部の導入となっているようです。取材の日は5月2日まき分の収穫直前で、圃場で作柄を確認しながらお話を伺いました。

大木晃さんが「フレアルージュ」の長所としてあげるのは、**①節間が短く抽苔も遅い、②立性でバランスのよい形状でそろいよく、作業性がよいこと。**

下葉の細菌性病害の発生が少なく、高い晩抽性で高温期を通して出荷可能な点を評価いただき、軟腐病やチップバーンに対する強さも従来品種と遜色ないレベルと捉えられています。

従来品種より定植から収穫まで3日程度遅いとのことでしたが、在圃性のよさと捉えており、評価は上々です。5～7月まきの高温期での本格的な導入を考えておられました。

低温伸張性はそれほど高くないため、「フレアルージュ」は5～7月まきで作付し、春先と8月以降の播種期には低温伸張性のある品種で経営の安定を目指したいといわれます。

事例② 伍賀地区 大木 慎也さん 「グリーンサンバ」

大木慎也さんは4月下旬から10月中旬までリーフレタスを延べ10ha程度栽培されています。レッド系・グリーン系半々の割合で出荷されて、出荷量が多くなるのは5月中旬からです。

取材時はあいにくの雨の中での収穫でしたが、6月5日まき「グリーンサンバ」（200穴セルトレイで育苗→6月20日定植→7月27日から収穫）に関してお話を伺いました。

やはり作業性のよさには十分満足しておられ、そろいがよく、葉がしなやかで葉枚数が多く箱詰めがスムーズにできて、見ばえも良好とのことです。

また、雨の多い時期に株元から発生する細菌性病害や生理障害への強さにも注目されておられました。リーフレタスでは梅雨が明け、乾燥時期になると、一般に葉が開き気味になり、梅雨時期と比べやや作業性の評価が落ちることが多々あります。その見極めは次年度になりそうですが、栽培しながら引き続き確認していきたいといわれます。

「フレアルージュ」「グリーンサンバ」さらなる進化を期待

伍賀地区でリーフレタス導入の条件は**①根腐病に強いこと、②斑点細菌病、べと病にかかりにくいこと、③立性で葉ぞろいよく、また株ぞろいがよく作業性がよいこと**、などです。また近年の夏季の高温や豪雨などに影響されにくく、生理障害が出にくいことも必要な条件といわれています。

「フレアルージュ」「グリーンサンバ」はともにこの地区で実績を積み上げ、生産者の声を元にさらに進化させていこうと思います。

←↑
大木慎也さんと「グリーンサンバ」収穫風景。6月5日まき（200穴セルトレイ）、14～15日育苗、7月27日収穫。

↑「グリーンサンバ」は株のそろいよく、軸太で立性、外内の葉ぞろいよい。